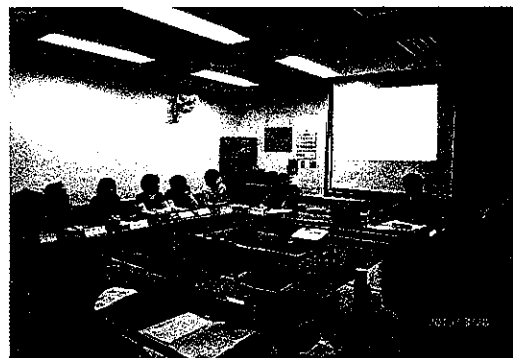


NPO法人発達わんぱく会理事長 小田 知宏さんをお招きして

3月28日(土)13時～15時 中央公民館 参加者15名

「こんなことをすればもっといきいきと過ごせる人が増えるのでは」多くの方がそんな思いから市民活動を始めるのではないのでしょうか。そんな思いをひとつひとつ形にし、事業内容をより充実させながら活動を続けているのが発達障がい児の療育事業に取り組んでいる「NPO法人発達わんぱく会」です。理事長の小田知宏さんをお招きして活動の歩みや、その思い、事業運営についてお話を伺いました。



●活動の原動力 →自分が一番やりたいこと

大学卒業後、商社勤務を経て2000年に高齢者福祉事業の仕事に就きました。最初から福祉分野に興味があったわけではなく、ちょうど介護保険制度がスタートした年で、この制度によって新しいマーケットが生まれるなと思ったくらいでした。しかし、この仕事を通じて発達障がい者の就労支援事業に係わり、発達障がいの方と知り合いました。彼らは天才ではとも思える素晴らしい才能を持っている一方、苦手な部分があり、その部分が社会不適応ということになっているのが現実でした。

幼児期に適切な療育を受けていればそういった才能を活かし、もっともっと豊かな人生を送ることが可能だということも知り、その療育に自分が係わりたいと思うようになりました。その後会社は無くなり、一時は違う分野の仕事に就いていたのですが、自分がやりがいを感じ、楽しくできる仕事は発達障がい児の療育だとわかり自分で2011年に事業を立ち上げました。現在浦安市内3か所で音楽療育、個別療育、グループ療育を行っています。

●人材育成 →NPO運営の根幹

人材育成は事業運営の大きな課題です。これができてこそ法人は目指す姿、地域社会を実現することができます。人材育成にはお金をかけないと質の良いサービスが提供できません。しかし、お金をかけ過ぎると赤字になるので、バランスが大事です。私たちの事業所では対象を障がいの中でも発達障がい、年齢は1歳半～未就学児、療育も「こころ」と「ことば」の分野のみとすることにより事業領域を絞り、その領域で役立つ資格を持った人を正規職員として採用しています。そしてまずは資格を活かして実際に現場で働くことで、自信を付けてもらい、そこからさらに専門分野を広げてもらっています。もちろん勉強時間は就業時間内で確保できるような仕組みにしています。こうした人材の育成により事業の専門性を高めることで他の事業所との差別化をはかっています。

●資金調達 →資金確保は早目が鉄則

長期資金は独立行政法人福祉医療機構や社会活動を支援する金融機関などから借り入れています。それ以外にも県や市の公的な支援や様々な助成金を受けています。資金確保は早目が鉄則です。借り入れには査定など時間がかかります。2～3年後を見据えて資金があるうちから準備しておきます。

●3年後、そして将来の展望 →可能性を活かせる社会を目指して

発達障がい児が早期に適切な療育を受けることができ、どんなことも自分の可能性を活かしながら成長できる社会を目指しています。そのためには全国に療育事業が広がっていかねばならないので、こちらから出向いて発達障がい児にアプローチする保育園の巡回支援事業、蓄積した療育のノウハウを活用して、事業所開設のためのコンサルティング事業の展開などを考えています。

<参加者の声>

*これまではボランティア募集時「誰にでもできることなのでお手伝いを」と呼びかけていましたが、これからは「得意なことを活かしてお手伝いを」とお願いした方がいいのかなと思いました。

*運営しているNPOの1つが財政面で行き詰まり休眠中です。今日のお話をもう少し早く聞けたら続けられたかとも思いました。



市民活動はこれまで、ボランティア（無償）での活動が主流でした。しかし時代背景が変わり、在宅の主婦を中心とした人材確保は難しく、また生活様式が多様化するのに伴い社会のニーズもより専門性を帯びてきています。活動を事業化するのもそれらの課題に向き合うためのひとつの形ではないでしょうか。

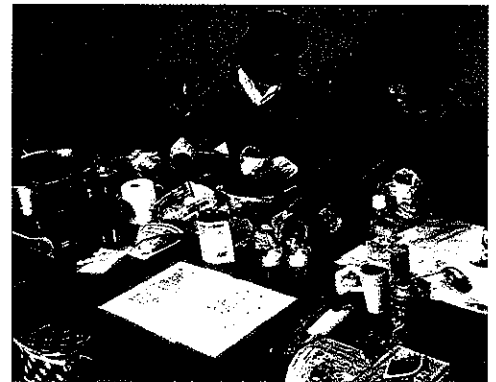
団体紹介

「親子のための防災」

「親子のため」 ～乳幼児を持つ親の視点で防災を考える～

って防災について実践的に学ぶことを目的として立ち上げた団体だ。

きっかけになったのは2011年うらやす市民大学の「うらやすの健やかな子育てを考えて行動する」の講座受講。講座修了の成果として親子向けの『おでかけマップ』と『防災ガイド』を作成し、それは浦安市の乳幼児2か月検診で配布されるなど評価も得られた。しかしそれだけでは終わらないで、ガイドの実際の使い勝手やそのガイドで伝え切れなかったことを伝えたいとの思いから2014年5月に受講生の有志が再度集まった。



目指すのは自分たちの視点で防災を考えることと伝え続けること。

「私たちは防災のスペシャリストではないので新しく何かを考え出すのではなく、集めた情報を実際に試してみ、本当に自分たちに役立つかチェックし直すということをやっています。

例えばあるホームページにツナやオイルサーディンの缶詰がランプとして代用できると書いてありましたが、実際にやってみるとオイルサーディンは見事に火が付き、2時間くらい燃え続けましたが、ツナはうまくいきませんでした。また、オムツの代用品としてレジ袋で作るのも、やってみると袋のサイズも様々でこどもに大きさが合った使えるオムツを作るのは容易ではありません。ホームページなどの情報は鵜呑みにできない、やってみないとわからないものだなと思いました。

震災から4年経ち、現在子育て中でもその当時お子さんがいなかった方がたくさんいます。乳幼児を抱えての被災は独自の大変さがあります。備蓄品一つをとっても乳幼児は月単位で必要なものが違うので、月齢に応じて見直しが必要です。そういった体験に基づく災害への備えを防災がクローズアップされる3月や9月だけでなく常時伝えていきたい。とはいえ、「防災」と気負った活動にはしたくないです」と代表の竹内さん。その言葉どおり、月1回の集まりでは我が家の安全対策チェック、備蓄食の試食、安心カード作りなどワークショップを中心に活動しているので、色々な発見もあり、楽しみながら震災への備えができる。

今後取り組んでみたいことは、活動を広く知ってもらい、メンバーを広げるために子育てサロンなど乳幼児を持つ親子が集まる場所に出向いてのワークショップと震災に限定しない、こどもの安全にかかわる活動への取り組み。若い団体の試みはまだ始まったばかりだ。

問い合わせ先：oyakobosai@gmail.com(親子のための防災)